

On local solvability of Partial Differential Equations with Multiple Characteristics

京大 理学部 松本和一郎

1. Introduction. 偏微分作用素 $L(x, \partial x)$ に対して、任意の $f(x) \in C^\infty$ を与えたとし、 $Lu = f$ を満たす解 $u(x)$ が必ず存在するか？ という問題を考える。 $L(x, \partial x)$ が principal type の時は必要十分条件が Nirenberg-Treves [7], Beals-Figgarman [1] によって与えられた。 Double characteristics を持つ場合については必要条件が Cardoso-Treves [3] によって与えられた。その中で彼等は、証明の経過から、subprincipal part が重要な役割をはたしていることを指摘している。

ここでは、characteristics の multiplicities は単に、locally constant として高い重複度も許す。そのかわり、 $L(x, \partial x)$ の主要部は実係数であると仮定して、subprincipal part にも仮定をのけて、一つの十分条件を与える。（[5] 参照，証明の基本評価は [4] を利用する。）

$$L(x, \partial x) = P(x, \partial x) + Q(x, \partial x) + R(x, \partial x) \quad x \in \mathbb{R}^n$$

とかく。 = = = . 1) $P(x, \partial x)$ は s 次で $L(x, \partial x)$ の主要部。実係数をもつものとする。 2) $Q(x, \partial x)$ は $s-1$ 次斉次部分。 3) $R(x, \partial x)$ は高々 $s-2$ 次である。なお $L(x, \partial x)$ の係数はすべて C^∞ -class としておく。主要部 $P(x, \partial x)$ に対する仮定をのべる。

仮定 I P の characteristics は locally constant multiplicities を持つ。

$$J = \{(x, \xi) \in V_x \times S_\xi^{n-1} \mid P(x, \xi) = 0\}$$

(V_x は \mathbb{R}_x^n の原点の近傍, S_ξ^{n-1} は dual space \mathbb{R}_ξ^n の単位球。) とおくと、任意の $(x_0, \xi_0) \in J$ に対してある (x_0, ξ_0) の $V_x \times S_\xi^{n-1}$ での近傍 W とある自然数 m (depending on (x_0, ξ_0)) があって、次を満たす。

J は W において、 x を fix すると ξ について一定の重複度 m をもつ。

上の仮定 I は、実は J を connected components J_k の union におくと、 J_k が x に無関係になるについて一定の重複度 m_k を持つことを意味している。更に J_k の各点の近傍において、適当に座標を回転することにより、 $\xi' = (\xi_2, \dots, \xi_n)$ とおくと、

$$P(x, \xi) = P_0(x, \xi) \{ \xi_1 - \psi(x, \xi') \}^{m_k}$$

と、 x について C^∞ , \bar{z} について holomorphic の枠内で分解できる。 $\equiv \equiv P_0(x, \bar{z}) = a_0(x) \left\{ \bar{z}_1^{s-m} - \sum_{j=0}^{s-m-1} a_j(x, \bar{z}) \bar{z}_1^j \right\}$ かつ、 $P_0(x, \bar{z})$ は考えている点の近傍でゼロにならない。又、 $P(x, \bar{z})$ が real-valued であることから、 $\psi(x, \bar{z})$ も real-valued となる。

2. 命題及び定理. 次は、subprincipal symbol

$\pi(x, \bar{z}) = Q(x, \bar{z}) - \frac{1}{2} \sum_{j=1}^n \frac{\partial^2}{\partial x_j \partial \bar{z}_j} P(x, \bar{z})$ に対しての仮定を述べ
 べる。 $J^{(2)} = \{(x, \bar{z}) \in J \mid \text{grad}_{\bar{z}} P(x, \bar{z}) = 0\}$ とおき、 $J^{(2)} = \bigcup_k J_k^{(2)}$
 と connected components に分ける。

仮定 II. $\pi(x, \bar{z})$ は各 $J_k^{(2)}$ 上で次の (A) 又は (B) のどちらかを満たす。

$$(A) \quad \text{Re } \pi(x, \bar{z}) \neq 0 \quad \text{on } J_k^{(2)}.$$

$$(B) \quad \pi(x, \bar{z}) \equiv 0 \quad \text{on } J_k^{(2)}. \quad \text{更に } m_k \geq 3 \text{ の時は}$$

$$\text{grad}_{\bar{z}} \text{Re } \pi(x, \bar{z}) \neq 0 \quad \text{on } J_k^{(2)}.$$

命題. 上の仮定の下に、任意の実数 ℓ に対してある原点の近傍 Ω とある正定数 C があって、

$$\|L^* u\|_{-\ell-s+2, \mathbb{R}^n} \geq C \|u\|_{-\ell, \mathbb{R}^n} \quad \text{for } \forall u \in \mathcal{D}(\Omega)$$

となる。特に $J^{(2)}$ 上で常に (A) が満たされている時は、

$$\|L^* u\|_{-\ell-s+1, \mathbb{R}^n} \geq C \|u\|_{-\ell, \mathbb{R}^n} \quad \text{for } \forall u \in \mathcal{D}(\Omega).$$

上の命題は、Calderón が Cauchy 問題の解の一意性の証明に用いた評価を修正して得られる。([2], [4] 参照)

命題を認めると、 $(u, v)_{\mathcal{H}} = (L^*u, L^*v)_{-l-s+2, \mathbb{R}^n}$ の内積で $\mathcal{D}(\Omega)$ を完備化すると、Hilbert 空間 \mathcal{H} が得られる。このとき、 \mathcal{H} は $H_{\Omega}^{-l}(\mathbb{R}^n)$ の稠密な部分空間となっている。

$(H_{\Omega}^{-l}(\mathbb{R}^n))' = H^l(\Omega)$ かつ $(H_{\Omega}^{-l}(\mathbb{R}^n))' \subset \mathcal{H}'$ だから、任意の $f(x) \in H^l(\Omega)$ に対して、Riesz の定理により唯一の \mathcal{H} の元 $u(x)$ が対応して

$$\langle f, \varphi \rangle = (u, \varphi)_{\mathcal{H}} \quad \text{for } \forall \varphi(x) \in \mathcal{H}$$

を満たす。特に $\varphi(x) \in \mathcal{D}(\Omega)$ に制限すると、 $\sqrt{|z|^2+1}$ を symbol にもつ pseudo-differential operator を Λ とかけば、

$$(u, \varphi)_{\mathcal{H}} = (\Lambda^{-l-s+2} L^*u, \Lambda^{-l-s+2} L^*\varphi)_{L^2}.$$

$\Lambda^{-l-s+2} L^*u \in L^2$ となる。 $\Lambda^{2(-l-s+2)} L^*u = v$ とおくと

$v \in H^{2l+2s-2}(\mathbb{R}^n)$ であり、 $(Lv, \varphi)_{L^2} = \langle f, \varphi \rangle$ 、すなわち

distribution の意味で $Lv = f$ in Ω 。なお、 $\mathcal{D}(\Omega)$ 上で常に (A) が満たされているときは、内積として、

$(L^*u, L^*v)_{-l-s+1, \mathbb{R}^n}$ を採用して、全く同様の推論を行えば、

次の定理を得る。

定理. 仮定 I, II の下に、任意の実数 l に対してある原点の近傍 Ω があって、任意の $f(x) \in H^l(\Omega)$ に対して $Lv = f$ in Ω

の解 $v(x) \in H^{\ell+s-2}$ が存在する。特に $J^{(2)}$ 上で常に (A) が満たされている時は $v(x) \in H^{\ell+s-1}$ にとれる。

3. 命題の証明.

$-\ell-s+2$ のかわりにあらためて $-\ell$ とかま。又、 L が L^* と同じ条件を満たすことから、 L を用いて

$$\|Lu\|_{-\ell} \geq C \|u\|_{-\ell+s-2} \quad \text{for } \forall u(x) \in \mathcal{D}(\Omega)$$

を証明する。証明は $\mathbb{R}_z^n - \{0\}$ の単位の分割を用いるが、そのとり方は、以下のものである。すなわち、まず \mathbb{R}_z^{n-1} の単位の分割 $\{\alpha_j(z)\}$ をとり、 $z \in \mathbb{R}^n - \{0\}$ に対しては、

$\alpha_j(z) = \alpha_j(z/|z|)$ で定義する。 \mathbb{R}_z^{n-1} 上での $\{\alpha_j(z)\}$ のとり方は、 \mathbb{R}_z^{n-1} 上の各点 z_0 について、その近傍に support を持つ $\{\alpha_j\}$ ($\alpha_j(z) \geq 0$) をとる。そのうちから、 $\{\text{supp}[\alpha_j]\}$ が \mathbb{R}_z^{n-1} の covering になるように、Heine-Borel の定理により有限個をとり出し、 $\tilde{\alpha}_j(z) = \frac{\alpha_j(z)}{\sum_j \alpha_j(z)}$ とおけばよい。各点 z_0 の近傍のとり方と、 $z=0$ での $\|x \wedge^{-\ell} Lu\|$ の下からの評価は、次の五つの場合に分けて、検討する。 $J \cap \{x=0\} \times \mathbb{R}_z^{n-1}$ を \dot{J} とかま、他も = れにならう。

Case 1. $z_0 \notin \dot{J}$

Case 2. $z_0 \in \dot{J} \setminus \dot{J}^{(2)}$

Case 3. $z_0 \in \dot{J}_k^{(2)}$ であつ、 $z=0$ で (A) が満たされている。

Case 4. $z_0 \in \overset{\circ}{J}_R^{(2)}$ で $m_R = 2$, (B) が満たされている。

Case 5. $z_0 \in \overset{\circ}{J}_R^{(2)}$ で $m_R \geq 3$, (B) が満たされている。

==では. Case 4 の場合は Case 2 の評価を2度用いることにより. 又. Case 5 の場合は. Case 3 の評価と Case 2 の評価をくり返して適用することにより. 容易に得られるから省略する. さしあたり. $\Omega = B_h$ とする. B_h は原点を中心とする半径 h の球である. 一般に.

$$(1) \quad \alpha(D) \Lambda^{-l} L(\alpha, D) u = P(\alpha, D) (\alpha \Lambda^{-l} u) - iQ(\alpha, D) (\alpha \Lambda^{-l} u) \\ - i \operatorname{grad}_z \Lambda^{-l} \cdot \operatorname{grad}_x P(\alpha, D) (\alpha u) \\ - i \operatorname{grad}_z \alpha(D) \cdot \operatorname{grad}_x P(\alpha, D) (\Lambda^{-l} u) + \tilde{R}(\alpha, D) u, \\ (\tilde{R}(\alpha, D) \text{ は高 } R^S - 2 \text{ 次}).$$

4. Case 1. (elliptic estimate). $z_0 \notin \overset{\circ}{J}$ かつ.

z_0 の近傍 U_{z_0} と $\forall \epsilon$ を十分小さい数とれば. $\overline{V_\alpha} \times \overline{U_{z_0}} \cap J = \emptyset$ とれる. (1) の右辺において. symbol $P(\alpha, z)$ は $\operatorname{supp}[\alpha]$ の外では z について自由に修正してよいため. 適当に修正すると. global に $|P(\alpha, z)| \geq \delta |z|^S$ ($\delta > 0$) とできる. したがって.

$$(4.1) \quad \|\mathcal{P}(\alpha, D)(\alpha \Lambda^{-l} u)\| \geq \delta \|\alpha \Lambda^{-l} u\|_s - C(k, h) \|u\|_{-k}$$

ゆえに (1) の estimate は

$$(4.2) \quad \|\alpha \Lambda^{-l} Lu\| \geq \frac{\delta}{2} \|\alpha u\|_{s-l} - \sum_{j=1}^n \|\alpha_{\mathcal{J}_j} u\|_{s-l} \\ - C \|u\|_{s-l-2} - C(k, h) \|u\|_{-k}.$$

更に $\|\alpha_{\mathcal{J}_j} u\|_{s-l}$ の処理のために $\|\alpha_{\mathcal{J}_j} \Lambda^{-l} Lu\|$ の評価

$$(4.3) \quad \|\alpha_{\mathcal{J}_j} \Lambda^{-l} Lu\| \geq \frac{\delta}{2} \|\alpha_{\mathcal{J}_j} u\|_{s-l} - C \|u\|_{s-l-2} - C(k, h) \|u\|_{-k}$$

を用いると、適当な正定数 C_j ($1 \leq j \leq n$) により

$$(4.4) \quad C \|Lu\|_{-l} \geq \|\alpha \Lambda^{-l} Lu\| + \sum_{j=1}^n C_j \|\alpha_{\mathcal{J}_j} \Lambda^{-l} Lu\| \\ \geq \frac{\delta}{2} \|\alpha u\|_{s-l} - C' \|u\|_{s-l-2} - C(k, h) \|u\|_{-k}.$$

5. Case 2. (hyperbolic estimate). まず $\mathcal{J} \setminus \mathcal{J}^{(2)}$ 上の各点の近傍に support をもつ $\{\alpha_j^{(1)}\}$ をとり、 $\{\text{supp}[\alpha_j^{(1)}]\}$ が $\mathcal{J} \setminus \mathcal{J}^{(2)}$ の covering になるように Heine-Borel の定理で有限個をとり出す。更に $\{\text{supp}[\alpha_j^{(2)}]\}$ が $\mathcal{J} \setminus (\cup_j \text{supp}[\alpha_j^{(1)}])$ の covering になるように、有限個の $\alpha_j^{(2)}$ を追加する。このとき、 $\text{supp}[\alpha_j^{(2)}] \cap \mathcal{J} = \emptyset$ とするようにとれる。このようにとると、 $\sum_j \alpha_j^{(1)} + \sum_j \alpha_j^{(2)} \geq C_0 > 0$ on $\text{supp}(\sum_j \alpha_j^{(1)})$ となる。適当な座標の回転 により、

$$\mathcal{P}(\alpha, \mathcal{J}) = (\mathcal{J}_1 - \psi(\alpha, \mathcal{J}')) \mathcal{P}_0(\alpha, \mathcal{J}) \quad \text{on } \text{supp}[\alpha_j^{(1)}]$$

かつ $\mathcal{P}_0(\alpha, \mathcal{J}) \neq 0$ on $\text{supp}[\alpha_j^{(1)}]$ とできる。

簡単のために、 $\alpha_j^{(1)}$ を α とかくと、(1) より

$$(5.1) \quad \|\alpha \Lambda^{-l} L u\| \geq \| (D_1 - \psi(\alpha, D')) P_0(\alpha, D) \alpha \Lambda^{-l} u \| \\ - \|\alpha u\|_{s-l-1} - \sum_{j=1}^n \|\alpha_{\bar{j}} u\|_{s-l} - c \|u\|_{s-l-2}.$$

§ 5.1. $\| (D_1 - \psi(\alpha, D')) P_0(\alpha, D) \alpha \Lambda^{-l} u \|$ について. $\beta(\alpha) \in \mathcal{D}(B_{2h})$

ε . $\beta(\alpha) = 1$ on B_h とするよりにとる。擬微分作用素の quasi-local property を考慮すると、 $v = P_0(\alpha, D) \alpha \Lambda^{-l} u$ とおいて

$$\| (D_1 - \psi(\alpha, D')) v \| \geq \| (D_1 - \psi(\alpha, D')) \beta v \| - C(k, h) \|u\|_{-k}$$

を得る。右辺第一項に weight function $\varphi(\alpha_1) = (\alpha_1 + 3h)^{-1}$ を用いて Calderón 式評価を行うと。([2] 参照)

$$\| (D_1 - \psi(\alpha, D')) \beta v \| \geq h \| \varphi(\alpha_1) (D_1 - \psi(\alpha, D')) \beta v \| \\ \geq h \| \varphi'(\alpha_1) \beta v \| \\ \geq 5^{-2} h^{-1} \|v\| - C(k, h) \|v\|_{-k}.$$

更に $P_0(\alpha, D)$ が $\text{supp}[\alpha]$ 上で elliptic ゆえ、Case 1 と同様にして、

$$(5.2) \quad \| (D_1 - \psi(\alpha, D')) P_0 \alpha_j^{(l)} \Lambda^{-l} u \| \geq c_0 h^{-1} \|\alpha_j^{(l)} u\|_{s-l-1} \\ - C(k, h) \|u\|_{-k}.$$

§ 5.2 $\|\alpha_{j\bar{k}}^{(l)} u\|_{s-l}$ について. 一方、 $\|\alpha_{j\bar{k}}^{(l)} u\|_{s-l}$ については、

$$(5.3) \quad \|\alpha_{j\bar{k}}^{(l)} u\|_{s-l} \leq c_0^{-1} \|\alpha_{j\bar{k}}^{(l)} (\sum_i \alpha_i^{(l)} + \sum_i \alpha_i^{(0)}) u\|_{s-l} \\ \leq C \left(\sum_i \|\alpha_i^{(l)} u\|_{s-l-1} + \sum_i \|\alpha_i^{(0)} u\|_{s-l-1} \right)$$

§ 5.3 $\|\alpha_i^{(2)} \Lambda^{-l} L u\|$ について及び総和. $\|\alpha_i^{(0)} \Lambda^{-l} L u\|$

に ついては. Case 1. (4.4) の elliptic estimate が 成り立
 つから. quasi-local property を考慮して.

$$(5.4) \quad \begin{aligned} \|\alpha_i^{(2)} \Lambda^{-\ell} L u\| &\geq \frac{\delta}{2} \|\alpha_i^{(2)} u\|_{s-\ell} - C \|u\|_{s-\ell-2} - C(k, h) \|u\|_{-k} \\ &\geq \frac{\delta}{2h} \|\alpha_i^{(2)} u\|_{s-\ell-1} - C \|u\|_{s-\ell-2} - C(k, h) \|u\|_{-k}. \end{aligned}$$

したがって (5.2) ~ (5.4) より.

$$\begin{aligned} &\sum_j \|\alpha_j^{(1)} \Lambda^{-\ell} L u\| + \sum_j \|\alpha_j^{(2)} \Lambda^{-\ell} L u\| \\ &\geq C_1 h^{-1} \left(\sum_j \|\alpha_j^{(1)} u\|_{s-\ell-1} + \sum_j \|\alpha_j^{(2)} u\|_{s-\ell-1} \right) \\ &\quad - C_2 \left(\sum_j \|\alpha_j^{(1)} u\|_{s-\ell-1} + \sum_j \|\alpha_j^{(2)} u\|_{s-\ell-1} \right) \\ &\quad - C' \|u\|_{s-\ell-2} - C(k, h) \|u\|_{-k}. \end{aligned}$$

よって.

$$(5.5) \quad \begin{aligned} \|L u\|_{-\ell} &\geq C_1 h^{-1} \left(\sum_j \|\alpha_j^{(1)} u\|_{s-\ell-1} + \sum_j \|\alpha_j^{(2)} u\|_{s-\ell-1} \right) \\ &\quad - C' \|u\|_{s-\ell-2} - C(k, h) \|u\|_{-k}, \\ &\quad (\text{for sufficiently small } h). \end{aligned}$$

6. Case 3. (subelliptic estimate).

§6.1. system 化. $\{\text{supp}[\alpha_j]\}$ が \mathbb{R}^n の covering
 になるように有限個の $\{\alpha_j\}$ をとる. 適当な座標の回転により.

$$P(x, \mathbb{Z}) = P_0(x, \mathbb{Z}) (\mathbb{Z}_1 - \Psi(x, \mathbb{Z}'))^m \quad \text{on } \text{supp}[\alpha_j].$$

== には $P_0(x, \mathbb{Z}) = a_0(x) \left\{ \mathbb{Z}_1 - \sum_{j=0}^{s-m-1} a_j(x, \mathbb{Z}') \mathbb{Z}_1^j \right\}$. $\text{proj } \mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{Z}' (\text{supp}[\alpha_j])$
 の外で $P(x, \mathbb{Z})$ を \mathbb{Z}' に関して適当に修正しておけば. C^∞ の
 滑らかさの枠内で $\Psi(x, \mathbb{Z}')$, $a_j(x, \mathbb{Z}')$ は global に定義される.

$$\begin{aligned}\Pi_0(x, D) &= P_0(x, D) (D_1 - \psi(x, D'))^m \\ i\Pi_1(x, D) &= \Pi_0(x, D) - P(x, D) + iQ(x, D) \\ &\quad + i \operatorname{grad}_x \Lambda^{-l} \cdot \operatorname{grad}_x P(x, D) \Lambda^l\end{aligned}$$

とおく。 (U) は

$$(6.1) \quad \alpha \Lambda^{-l} L u = \Pi_0(x, D) (\alpha \Lambda^{-l} u) - i \Pi_1(x, D) (\alpha \Lambda^{-l} u) \\ - i \operatorname{grad}_x \alpha(D) \cdot \operatorname{grad}_x P(x, D) (\Lambda^{-l} u) + \tilde{R}(x, D) u.$$

== 1. Π_1 の主要部を Π_1^0 とすると $\Pi_1^0(x, \xi) \equiv \Pi(x, \xi) \pmod{(\xi_1 - \psi(x, \xi'))^m}$.

さらに

$$\begin{aligned}\Pi_1^0(x, \xi) &= \sum_{k=1}^{m+1} b_k(x, \xi') |\xi'|^{s-k} (\xi_1 - \psi(x, \xi'))^{k-1} \\ &\quad + \sum_{k=m+2}^s b_k(x, \xi') |\xi'|^{s-k} \xi_1^{k-m-1} (\xi_1 - \psi(x, \xi'))^m\end{aligned}$$

($b_k(x, \xi')$ は $\xi'_1 = 1$ に関して齊次で order k の)

とおく。 (6.1) を system 化可る。 $|\xi'|$ を symbol とする擬微分作用素を Λ_0 とかく。 $\tilde{u} = \alpha \Lambda^{-l} u$ とおく。

$$u_j = \begin{cases} (\Lambda_0 + 1)^{s-j} (D_1 - \psi(x, D'))^{j-1} \tilde{u} & 1 \leq j \leq m+1 \\ (\Lambda_0 + 1)^{s-j} D_1^{j-m-1} (D_1 - \psi(x, D'))^m \tilde{u} & m+2 \leq j \leq s \end{cases}$$

とおき $U = (u_j)$ とかく。

$$(6.2) \quad \tilde{L}(x, D) U = D_1 U - H U - B U - G_1 U - G_2 U - \sum_{j=0}^n U_j.$$

== 1.

$$H(x, D') = \begin{pmatrix} \psi(x, D') & \Lambda_0 & & & \\ & \psi(x, D') & \Lambda_0 & & \\ \hline & & 0 & \Lambda_0 & \\ & & & & \ddots & \Lambda_0 \\ i b_1 & \dots & i b_m & a_0 + i b_{m+1} & \dots & a_{s-m-1} + i b_s \end{pmatrix},$$

$a_j(\alpha, D')$ は齊次で order 1, $b_j(\alpha, D')$ は齊次で order 0.

$$B(\alpha, D') = \left(\begin{array}{ccc|ccc} c_1 & 1 & & & & \\ & \ddots & \ddots & & & \\ & & 1 & & & \\ \hline & & & c_m & 1 & \\ & & & & 0 & 1 \\ & & & & & \ddots \\ & & & & & & 1 \\ & & & & & & & 0 \end{array} \right), \quad C_j = [(\lambda_0+1)^{s-j}, \psi] (\lambda_0+1)^{-(s-j)}.$$

$$G_1(\alpha, D') = \begin{pmatrix} 0 \\ \vdots \\ 0, \dots, 0, g_{m+1}^{(1)}, \dots, g_s^{(1)} \end{pmatrix}, \quad g_j^{(1)} = a_{j-m-1} \{ \lambda_0^{s-j} - (\lambda_0+1)^{s-j} \} \times (\lambda_0+1)^{-s+j}.$$

$$G_2(\alpha, D') = \begin{pmatrix} 0 \\ \vdots \\ g_1^{(2)}, \dots, g_s^{(2)} \end{pmatrix}, \quad g_j^{(2)} = i b_j \{ \lambda_0^{s-j} - (\lambda_0+1)^{s-j} \} (\lambda_0+1)^{-s+j}.$$

$$U_j = \begin{pmatrix} 0 \\ \vdots \\ u^{(j)} \end{pmatrix}, \quad u^{(j)} = i P'_{\alpha_j}(\alpha, D) \alpha_{\bar{j}} \Lambda^{-l} u = P_j(D, \psi)^{m-1} \alpha_{\bar{j}} \Lambda^{-l} u$$

($P_j(\alpha, D)$ は order $s-m+1$, $1 \leq j \leq n$),

$$\|u^{(j)}\| \leq \|u\|_{s-l-2}.$$

なお、明かに $\|\alpha \Lambda^{-l} L u\| = \|\tilde{L} U\|$.

§ 6.2. H の ψ に対応する固有値と固有vector. ψ に対応

する m 個の固有値は次の様に Puiseux 展開される。

Lemma 1.
$$\mu_j(\alpha, \bar{\zeta}') = \psi(\alpha, \bar{\zeta}') + \sum_{k=1}^{\infty} \nu_{j,k}(\alpha, \bar{\zeta}') |\bar{\zeta}'|^{-\frac{k}{m}}$$

特に $\nu_{j,1} = \omega^{(j-1)} \left\{ \frac{i b_j}{P_0} \Big|_{\bar{\zeta}' = \psi} \right\}^{\frac{1}{m}}$ は non-real ($1 \leq j \leq m$).

== ω は 1 の原始 m 乗根である。

(証明は [6], [4] 参照)

μ_j に属する $H/|S|$ の固有 vector $V_j = (V_{j,k})$ の主要部は.

Lemma 2. $V_{j,k} \sim (\mu_j - \psi)^{m-k} P_0(\alpha, \beta) |_{S_1 = \psi} \quad (1 \leq k \leq m)$
 $V_{j,s} = 1$

又. $V_{j,k} \quad (m+1 \leq k \leq s-1)$ の主要部の order は高々ゼロ。

§ 6.3. H_1 の ψ 以外の固有値と root vectors.

$$H_1(\alpha, \beta) = \left(\begin{array}{c|c} \begin{array}{c} \psi(\alpha, \beta) \quad |S| \\ \vdots \\ \psi(\alpha, \beta) \quad |S| \end{array} & |S| \\ \hline 0 \quad |S| \\ \vdots \\ \alpha_0(0, \beta_0) \frac{|S|}{|S_0|}, \dots, \alpha_{s-m-1}(0, \beta_0) \frac{|S|}{|S_0|} \end{array} \right)$$

とかくと. $\det(\lambda I - H_1) = (\lambda - \psi)^m P_0(0; \lambda, \beta_0 \frac{|S|}{|S_0|})$ となるから.

$\det(\lambda I - H_1) = 0$ の ψ 以外の根を $\lambda_k(|S|)$ とすると.

$\lambda_k(|S|) = \lambda_k |S|$ (λ_k は定数) となる. λ_k の重複度を r_k ($1 \leq k \leq g$) とする。

以下. $H_0 = H_1/|S|$, $\lambda_k = \lambda$, $r_k = r$ とかくと. $\lambda I - H_0$ の rank が $s-1$ かつ. root space の構造は自然に決まる。

root vector v は $v(\lambda I - H_0)^r = 0$ の non-trivial solution である。 $(\lambda I - H_0)^r$ の $m+1$ 列から $m+r$ 列までを除いた行列 H_4 の上から $s-r$ 行までをとった行列 H_5 が maximal

よから $NH = N_1H + N_2(H_1 + H_2 + H_3) = \partial N_1 + \partial N_2 + N_2H_2 + N_2H_3$
となる。

§ 6.5. $M = N^{-1}$ について.

Lemma 4. $\det N$ は true order $-\frac{m-1}{2}$ である。

Lemma 4 より. $M = N^{-1}$ は第 i 行が $\max\{1 - \frac{i}{m}, 0\}$
の order を持ち. $N = \begin{pmatrix} * & * \\ 0 & * \end{pmatrix}$ の形より M も $M = \begin{pmatrix} * & * \\ 0 & * \end{pmatrix}$ の形で
ある。従って. $M \cdot N - MN$ は order が高々 $-\frac{1}{m}$ である。特に m 行か
ら s 行までは高々 -1 の order である。さらに $M \cdot N - MN$ は
 $\begin{pmatrix} * & * \\ 0 & * \end{pmatrix}$ の形である。以上のことから. $NU = V$ とおき.

quasi-local property を考慮すると. 次の lemma を得る。

一般に $W = (w_k)$ とし $W =$ とす. $W^{(1)} = {}^t(w_1, \dots, w_m, 0, \dots, 0)$,
 $W^{(2)} = {}^t(0, \dots, 0, w_{m+1}, \dots, w_s)$, $W^{(3)} = {}^t(0, \dots, 0, w_m, w_{m+1}, \dots, w_s)$ と
かく。

Lemma 5. 任意の実数 k に対して.

$$\|(\Lambda_0 + 1)^{-\frac{1}{m}} V\|_k \geq C \|U\|_k - C' \|\alpha U\|_{s-l-2+k}$$

$$\|V^{(2)}\|_k \geq C \|U^{(2)}\|_k - C' \|\alpha U\|_{s-l-2+k}$$

$$\|V\|_k \geq C \|U^{(3)}\|_k - C' \|\alpha U\|_{s-l-2+k}$$

以下. $N \tilde{L} U$ の評価を行うのであるが. k_j ($1 \leq j \leq s$) を
正定数として. $K = \begin{pmatrix} k_1 & & \\ & \dots & \\ & & k_s \end{pmatrix}$ とおき. $KN \tilde{L} U$ の評価をする。

$$(\|KW\| = \sum_{j=1}^s k_j \|w_j\|).$$

$$(6.3) \quad \begin{aligned} KN\tilde{L}U &= K(D_1 - \Theta)V + iKN_2^1U - K(NH - N \circ H)U \\ &\quad - K(\Theta \circ N - \Theta N)U - KN_2H_2U - KN_2H_3U - KNBU \\ &\quad - KNG_1U - KNG_2U - \sum_{j=0}^n KNU_j. \end{aligned}$$

§ 6.6. type N と KN_2H_2 及び KN_2H_3 について. $A = (a_{ij}(D))$ が "type N" であるとは A が 次の 1)~3) を満たすことである。 1) $a_{ij} \in S_{i,0}^0$, 2) $\text{ord.}(a_{ij}) \leq \min\{-1 + \frac{j}{m}, 0\}$, 3) $1 \leq l \leq m, m+1 \leq j \leq S$ のとき $a_{ij} \equiv 0$.

Lemma 6. A が type N のとき $V = NU$ とすると

$$\|AU\|_R \leq C\|V\|_R + C(i) \|(\lambda_0 + 1)^i U\|_R.$$

Lemma 7. $KN_2^1, K(NH - N \circ H), K(\Theta \circ N - \Theta N), KNB, KNG_1, KNG_2$ はすべて type N である。

一方 N_2 の形と H_2 の Θ_{L^2} から L^2 への operator norm が $\text{supp}[\alpha]$ を十分小さくしぼってあげれば十分小さい ε までおさえられることから, $k' = \max_{m+1 \leq j \leq S} \{k_j\}$ とおくと

$$\begin{aligned} \text{Lemma 8.} \quad \|KN_2H_2U\| &\leq \varepsilon \|(\lambda_0 + 1)U^{(2)}\|, \\ \|KN_2H_3U\| &\leq k' \cdot C \|U\|. \end{aligned}$$

§ 6.7. $K(D_1 - \Theta)V$ の言評価. $1 \leq j \leq m$ のとき $K(D_1 - \Theta)V$ の第 j 行は $k_j \|(D_1 - \mu_j)V_j\|$ である。 $\|I_m \mu_j(x, D)V_j\| \sim \|(\lambda_0 + 1)^{-\frac{j}{m}} V_j\|$ であるから、 $\|(D_1 - \mu_j)V_j\| \geq \|V\|_{1-\frac{j}{m}} - C(i) \|U\|_{-i}$ を得る。
一方 $m+1$ 行から $S-1$ 行までは $k_j \|(D_1 - \lambda_j)V_j - \lambda_0 V_{j+1}\| \geq$

$k_j \|(D_i - \lambda_j) v_j\| - k_j \|\Lambda_0 v_{j+1}\|$, s 行は $k_s \|(D_i - \lambda_s) v_s\|$ である。 $\text{supp}[\alpha]$ の上で $\lambda_j - \lambda_{j+1}$ ($j=1$) はゼロに近づくから dual space の quasi-local property を考慮して、 $\text{supp}[\alpha]$ の外で λ_j を変更すると、 $\|(D_i - \lambda_j) v_j\| \geq C \|v_j\|_1 - C(h, i) \|u\|_{-i}$ を得る。 したがって適当に k_j ($m+1 \leq j \leq s$) を fix し、 $k_1 = \dots = k_m = k_0$ とすると、

$$(6.4) \quad \|K(D_i - \Theta) V\| \geq C_0 k_0 \|V^{(1)}\|_{1-\frac{1}{m}} + C_1 \|V^{(2)}\|_1 - C(h, i) \|u\|_{-i}$$

(6.4) 及び Lemma 5, 6, 7, 8 により、 k_0 を十分大きく、 k を十分小さくとれば次の評価を得る。

$$(6.5) \quad \|K \mathcal{L} U\| \geq C_0' (\|U\| + \|U^{(3)}\|_{1-\frac{1}{m}}) - \sum_{j=1}^n \|U_j\| - C \|u\|_{s-l-2} - C(k_j, k, i) \|u\|_{-i}.$$

一方、 α のかわりに $\alpha_{\mathcal{J}_j} \Lambda^{\frac{1}{m}}$, $\alpha_{\mathcal{J}_j \mathcal{J}_k} \Lambda^{\frac{2}{m}}$ を用いてつくられる U に対応するものは $U_{(j)}$, $U_{(j,k)}$ とかくと、 $\|U_j\| \leq C \|U_{(j)}^{(3)}\|_1$, $\|U_{j,k}\| \leq C \|U_{(j,k)}^{(3)}\|_1$ であるから、適当に $C_j, C_{j,k}$ ($1 \leq j, k \leq n$) をとれば、

$$(6.6) \quad \|\alpha \Lambda^{-l} L u\| + \sum_{j=1}^n C_j \|\alpha_{\mathcal{J}_j} \Lambda^{\frac{1}{m}-l} L u\| + \sum_{j,k=1}^n C_{j,k} \|\alpha_{\mathcal{J}_j \mathcal{J}_k} \Lambda^{\frac{2}{m}-l} L u\| \geq C \|\alpha u\|_{s-l-1} - C(k_j, k, i) \|u\|_{-i} - C' \|u\|_{s-l-2}.$$

(6.4), (6.5), (6.6) を寄せ集めると、

$$(6.7) \quad \|L u\|_{-l} \geq C \sum_{j=1}^n \|\alpha_j u\|_{s-l-1} - C \|u\|_{s-l-2} - C(h, i) \|u\|_{-i} \geq C \|u\|_{s-l-1} - C(h, i) \|u\|_{-i}.$$

ところで $i = s-l-3$ により、 $u(x)$ を $\mathcal{D}(B_d)$ ($d < h$) の元に制限

すると、十分小さい d については (6.7) は下の不等式を含んでゐる。(L. Nirenberg - F. Trèves [7], Part II 参照)

$$(6.8) \quad \|Lu\|_{-l} \geq C_0 \|u\|_{s-l-1}.$$

Q. E. D.

References

- [1] R. Beals and C. Fefferman : On local solvability of
l. p. d. e. Ann. Math. 97, 482-498 ('73)
- [2] A. P. Calderón : Uniqueness in the Cauchy problem
for p. d. e. Amer. J. 80, 16-36 ('58)
- [3] F. Cardoso and F. Trèves : A necessary condition of
local solvability for pseudo-d. e. with double
characteristics. Ann. Inst. Fourier, 24 (no. 1),
225-292 ('74)
- [4] W. Matsumoto : Uniqueness in the Cauchy problem
for p. d. e. with multiple characteristic roots.
J. Math. Kyoto Univ. (to appear).
- [5] ——— : Local solvability of a class of p. d. e.
with multiple characteristics. Proc. Japan. Acad.
(to appear)
- [6] S. Mizohata and Y. Ohya : Sur la condition
d'hyperbolicité pour les équations à caractéristiques

multiples II. Japan J. Math. 40, 63-104

(1971)

- [7] L. Nirenberg and F. Trèves : On local solvability of l. p. d. e. Part I Necessary condition, Part II Sufficient condition. Comm. Pure Appl. Math., 23, 1-38, 459-509 (1970).